

痛い、痛い。ヤマグチ君が僕の頭を壁にたたきつける。痛い、痛い。部屋にゴンゴンというくぐもつた音が響いた。

僕が悪かったんだ。ヤマグチ君は、僕が美樹ちゃんのことを好きになってしまったことが、きつと気に入らなかったのだ。だから、ヤマグチ君は僕を罰している。

「ナオちゃん。どうしたの。」

急におばあちやまが入って来たので、ヤマグチ君は部屋をすりと抜け出すと、家に帰ってしまった。

「まあ、ナオちゃん。いったいどうしたっていうの」

僕のおでこには瘤ができて、その先が少し切れていた。だけど僕はヤマグチ君のことを話さなかった。ヤマグチ君は、自分のことについて話しをされるのが好きじゃない。だから僕はずっとヤマグチ君のことを黙っていた。

おばあちやまは僕のおでこに軟膏を塗って、バンドエイドを貼ってくれた。

ヤマグチ君がいつから僕のうちに来るようになったのか、ぼくは思い出せない。ずいぶん昔のことだったような気がする。

子供の頃、僕は小児ぜんそくで、おまけに小学校に行つてからもおねしよをする癖があった。両親が離婚したため、僕のうちはママとおばあちやまの三人

暮らした。ママは会社を経営していて、いつも夜遅くまで帰って来ない。

その日、おばあちやまはかなりご機嫌が悪かった。たぶんママとケンカしたのだろう。ママとおばあちやまは時々大きなケンカをする。でも、そんな日に限って、僕はまたおねしよをしてしまう。しかたなく僕は隣の部屋に寝ていたおばあちやまを起こした。おばあちやまはぶつぶついながらシーツと蒲団を換えて、僕のお尻をお湯でふいてくれた。

「今度おねしよしたら、ちんちんをちよん切ってしまいますからね」

僕は、とてもびっくりした。だから、とっさに嘘をついた。

「僕じゃないよ。僕は、おねしよなんかしていないよ。誰かが、僕のベッドに入ってきて、その子がおねしよをたんだ」

僕は嘘をついたことをこのあとずっと後悔した。

ヤマグチ君に初めて会ったのは、僕がたしか熱を出して寝ていた時だ。僕は耳まで熱くなつてベッドに寝ていた。熱を測りに来たおばあちやまの手がとても冷たくて気持ち良かった。おばあちやまが部屋から出てい行くと、ドアの所に男の子がニコニコ笑って立っていた。髪の毛が少し長くてベネトンの薄紫色のトレーナーを着ていた。そのトレーナーはぼくも持っていたので、僕はほんの少し嬉しくなった。その子がヤマグチ君だった。僕の学校のクラスにもヤマグチ君がいるけ

れど、この子とは別の子だった。

僕はヤマグチ君がすぐに気に入ってしまった。僕とは違う学校に行っているの
で、昼間は会えないのだけれど、僕が家にいる時はよく遊びに来る。僕と同じ
遊びをして、たいてい夕ご飯になると帰ってしまう。でも、時々、僕が寝るま
でいてくれることもあった。二人で外に遊びに行くこともあったけれど、ヤマ
グチ君はたいてい途中で帰ってしまう。僕が相手をしてあげないと不満らしい。
僕が他の子供と遊んでいると急に姿が見えなくなってしまうのだ。

ヤマグチ君はとても親切だったけれど、時々ひどい意地悪をした。僕が悲し
かったり、淋しかったりすると、冷たい目をして僕を睨んだ。そして、僕の手を
とると、指先を口の中に入れてがりがりと噛んだ。ヤマグチ君が噛んでいる時
はそんなに痛くはないのだけれど、ヤマグチ君がいなくなると、指先がズキズキ
と痛んだ。でも、僕はもう慣れてしまい、ヤマグチ君が僕の指を噛みたがって
るのがわかると、僕はヤマグチ君に自分から手を差し出していた。おかげで僕
の両手の指は、つめが変形していつも皮がむけていた。

ヤマグチ君は、僕が悲しんだり淋しがったりするのがとても嫌いだった。一度、
僕がおばあちゃんにしかられて泣いていた時、ヤマグチ君はいきなり僕のほっぺ
たに噛みついた。僕のほっぺたには跡が残った。そのあとも、僕の胸や太ももを
爪で引っ掻いたりすることがあったので、僕はおばあちゃんに見つからないよう

に治療するのが大変だった。

ある日、僕は三浦君のうちに遊びに行った。三浦君が、ハムスターが子供を産んだので見せてくれるといっていたのだ。ヤマグチ君も珍しくいっしょについて来た。ハムスターはもう毛が生えそろって、小さいけれど、もぞもぞと動いた。僕はその可愛い小さな動物から目を離すことができなくなっていた。でも、僕にはぜんそくがあるので、うちで動物を飼うことは禁止されいる。僕はハムスターの子がとても欲しかったけれど、やつぱりあきらめた。

帰り道、ヤマグチ君は僕の前に立ち止まると、ニヤニヤしながら握りこぶしを突き出した。こぶしをぱつと開けると、手のひら中にはハムスターの子がいた。ヤマグチ君はハムスターの子を盗んで来てしまったのだ。僕は、すっかり困ってしまった。目に涙が浮かんで来た。僕のうちではハムスターは飼えない。返しに行ったら、三浦君にはなんて説明したらいいのだろう。

ハムスターを僕の顔の前に突き出すと、ヤマグチ君が怖い顔をした。僕が首を横に振ると、ヤマグチ君は親指と人差し指でハムスターの首を絞めた。ハムスターはキーというかすかな鳴き声をあげて、小さな手と足を何度か引きつるようのように動かすと止まった。ヤマグチ君は死んだハムスターを握り締め、ハムスターの首をひねった。二度も三度もひねると、ハムスターの首はちぎれか

けてぶらぶらに伸びた。首をつまんで自分の目の前でゆすると、ヤマグチ君は僕の目を見つめながらニヤリと笑い、ハムスターに下の方から食いついた。

僕の口の中は、血の味でいっぱいになった。僕はおしっこを漏らしていた。暖かい液体が左側の太ももを伝い、靴の中まで入っていた。いつの間にか、ヤマグチ君は僕をおいて帰ってしまい、僕は泣きながら不愉快な足を引きずって家まで帰った。涙と鼻水をぬぐうと、セーターの袖口にハムスターの毛がついていた。

その晩、ヤマグチ君は僕の部屋に帰ってきた。ヤマグチ君は、ひどく怒っていた。僕が好意を無にしたからだ。だから、ヤマグチ君は、お仕置きをしに戻ってきたのだ。ヤマグチ君は僕の手をおさえつけると、カッターを取出して、僕の腕をすうっと横に切った。

「やめて。お願いだから、やめてよ」

僕は目の前のことが信じられなかった。いくらヤマグチ君でも、こんなことをするなんて。ヤマグチ君はおかしくなっちゃったんだ。血が溢れ出してきた。僕は、これは夢だと思った。こんなことが起きるはずはない。これはきつと僕の夢なんだ。そう思うと眠くなつて僕はいつのまにか寝てしまった。しかし、朝目覚めてみると、僕の腕には血だらけの傷が一すじ残っていた。

それから、ヤマグチ君はずっと僕についてくるようになった。僕がヤマグチ君の

ことを少し嫌いになったことがわかったのだろうか。学校でも教室の後ろにずっと立って僕を監視している。いつも怖い顔で僕のことを睨んでいる。

その日は、僕と美樹ちゃんが日直だった。僕たちはみんなが帰った後、教室を点検して学級日誌を書いていた。僕が最後の所を書いていると、美樹ちゃんが大きな声を上げたので、顔を上げてみると、ヤマグチ君が、美樹ちゃんを後ろから抱きしめていた。ヤマグチ君は、美樹ちゃんの口をふさぎ後ろに引き倒した。

パチンと僕のほつぺたが鳴った。美樹ちゃんは、組み伏せられて僕の下にいた。美樹ちゃんの顔は、僕の目の前にあった。僕がからみつく美樹ちゃんの手を顔からはずすと、僕の手は美樹ちゃんの首に巻き付いていた。ヤマグチ君がそれを上から押さえた。美樹ちゃんのどがクーという音を立てた。ヤマグチ君がとても嬉しそうな顔をしてうなづいた。

そこに、学級委員の村田君が入ってきた。ヤマグチ君はどこかにいつてしまい、床には美樹ちゃんが倒れていた。

「どうしたんだ」

村田君が叫んだ。今度は、僕がヤマグチ君になる順番だった。僕は村田君の前にひざまずくと、呆然としている村田君の手をとって口の中に入れた。